グリムの昔話と類話 3　　魔女と山姥

2012 年 小平市中央図書館 民話講座　岡部由紀子

善い魔女、悪い魔女

唯一神（キリスト教）…　神（絶対的善）⇔　悪魔（絶対的悪）
自然霊や先祖霊など …　両義的な性格を持つ（加護　⇔　祟りや災い）

ヨーロッパ古来の土着の神々や精霊、その祭祀者
→　キリスト教の浸透と共に否定されていった
　　邪悪な存在、悪魔と結びついたもの　＝　魔女、人食い

　魔女狩り 15, 16, 17 世紀
　　病気、災害、不作、家畜の被害などは、魔女の妖術によるもの
　　生死に関わる仕事の産婆や民間薬の作り手は、悪魔との関連を疑われた
　　火あぶりの刑 … ドイツだけで２万５千人以上（1450−1755）

雷を作っている魔女達 16 世紀

多神教的な土壌は、キリスト教化が遅れた辺鄙な地域に残った
→　祭の習俗、民間伝承、農事暦
　「魔女」は荒々しい怖い存在でありながら、予知能力や病を治す知恵を持つ助言者
　　豊かな実りや獲物を人々に恵む豊穣神の性格を引き継ぐ
　　ドイツ語では、Hexe　Hexer　Elfe　Zauberin　Zauberer　などが類義語

グリム童話の中の「魔女」の仲間
　超自然的な力を持つ善玉と悪玉
　＊ヘンゼルとグレーテルの魔女　Hexe
　　人食い、高齢、足が不自由、赤い目、痩せた身体ととがった顎と鼻
　＊ホレおばさん　　よい子に褒美、悪い子に罰
　＊トゥルーデおばさん　　恐ろしく、残酷

参考：資料 11

パンの家に住む老婆は何者か

パンスコップは、なぜ初稿に登場するのか

魔女が飛ぶときに使うのは箒だけではない
　棒状のもの　…　パンスコップ、火掻き棒
　筒型のもの　…　バター作りの桶、臼（すり鉢）

ロシア民話の魔女バーバ・ヤガーは、臼に乗り杵や箒を操って飛ぶ　　参考：資料 12
パンスコップ、火掻き棒、箒、臼は、パン作りに欠かせない道具

パンの持つ不思議な力

ヒエロニムス・ボス（1450? – 1516）「魔女たち」部分
パンをのせたパンスコップで飛ぼうとする魔女

発酵という不思議な過程を経て、窯の中で火の力を借りてできるパンには、特別の霊力が宿る
災いや悪霊を追い払うパン。幸運をもたらすパン

旅に出る者は、家のパンのかけらを携帯する
婚家の前で、花嫁はパンを渡される。ひとかけらを切り取り、大事に保管する（食糧不足から婚家を守るお守り）
家を建てた祝いには、パンと塩を贈る

命を育むもっとも大切な糧（日本の米、餅と類似）

パン窯は死と再生の場

霊力が宿るパンは、家のパン窯から生まれる。
　パン窯には、先祖霊が宿り、新生児となり再生するのを待っている　…　パン窯は胎内との連想

→　窯の中で焼かれることは、死と同時に再生をも意味する。
　　蘇りの場であるパン窯で焼かれた魔女
　　子ども達が見つけた宝物は、魔女が死んで生じたもの

死んで恵みを残す「山姥」

馬方山姥（宮城県登米郡の民話）　　参照：資料 13
　山道で出会った山姥に荷の魚も馬も食われ、自分も食べられそうになった馬方が、山姥の家に隠れ、唐櫃にはいって寝た山姥を焼き殺す。黒焼きになった山姥を万病の薬として売り、大もうけする。
　→　苦しんで死んだ山姥が、貴重なものに変わり、殺した者が富を得る

　山姥が真っ赤などろどろしたものになり、それから根の赤い作物が発生　…　人参の起源
　作物を奇跡的に豊かに実らせる力を持つ山姥　（高知県の伝説）

ちょうふく山の山姥（秋田県仙北郡の民話）　　参照：資料 14
　山姥は子供を大事にする。山姥のお産の祝いに餅を届けたお婆さんが、産後の家事を手伝って、減ることのない錦の反物を礼にもらう。
　→　山姥のお産を手伝うと、幸せを授かる
　　山姥は、糸の生産に奇跡的な力を発揮する
　　糸車をブンブン回し、乳房から乳のように糸を無尽蔵に出す（香川県坂出市）

山姥は、恐ろしい人食いという一面と、豊穣を司る古来の女神の性格を併せ持つ
恐ろしい性格が強調される昔話が多い
　→　山姥のイメージの固定化

魔女は穀物霊？

子供を脅す麦おばさん 1933 年
ヴァルター・トリアー 画

「麦おばさん」　Kornmutter, Roggenmuhme　麦＝ライ麦

（地域によって、穀物霊は、穀物おじさんや穀物オオカミとなる）

麦を実らせる豊穣神である穀物霊

麦が受粉する夏至の頃、麦をうねらせて吹いていく疾風

麦畑に住みついて、麦が実る頃、穀物霊は老年となる

子供を誘拐して殺すおそろしい穀物霊

たとえば麦おばさんはこんなイメージ（19 世紀末の民俗調査）

赤い目、灰色の髪、黒い鼻、鉄でできた長い乳房

→　麦畑を踏み荒らすことの禁忌

Die Roggenmuhme

Laß stehn die Blume!
Geh nicht ins Korn!
Die Roggenmuhme
zieht um da vorn!

Bald duckt sie nieder
bald guckt sie wieder;
sie wird die Kinder fangen
die nach den Blumen langen.

(August Kopisch, Gedichte 1836)

ライ麦おばさん

花をとってはだめ！
麦畑にはいってはだめ！
ライ麦おばさんがほら、そこを通る！
おばさんは、身をかがめて隠れたり
また、こちらを覗いたり;
花をとろうとする子どもたちを
つかまえようと待っている。

（アウグスト・コーピッシュの詩　1836年）

訳　岡部由紀子

マックス・スレフォークト　穀物霊
『ドイツ民俗地図』 挿絵 1930 年

麦おばさんはどうなるか？

麦の収穫のとき、「麦おばさん」最後に残った一握りの麦に逃げ込む
刈り取った麦を３つの束にして、穂を頭に見立てた人形を作る

殺される　…　畑や納屋で、から竿で打たれて脱穀される
捕らえる　…　荷車の上に飾り、家に持ち帰り、種籾に混ぜる
　　収穫祭の飾り冠に使う　燃やした灰を畑にまく

女性をかたどった穀物霊　南ドイツ

年老いた穀物霊は収穫時に殺され、翌年若い穀物霊として蘇ると考えられていた

グレーテルに殺される老婆

魔女のルーツのひとつが穀物霊であり、死と再生の自然の循環を司る豊穣神の性格を色濃く持つ。
この昔話は、彼岸である森に住む穀物霊が、子供を殺して食べることによって、新しい力を得ようとするが、死と再生の場であるパン窯で焼かれて、富を生み出す、そのような古い伝承に基づいている。
富は、古くは宝石ではなく、種籾だったかもしれない。